

分断されたアメリカと今後：
Toby Keith と System of a Down と
Bruce Springsteen の作品から読む
(9.11 後のアメリカのミュージック・シーン 2)

加藤隆治

序

2004年11月に行われたアメリカ大統領選挙は、僅差の大接戦となった2000年のゴア対ブッシュが再現されるのではないかという事前の予想を覆し、あっさり現職ブッシュ大統領が勝利した。その大統領選へ向けての反ブッシュ陣営の動向は日本においてもかなり頻繁に報道された。大物ミュージシャンのキャンペーン活動などにより、日本にいながらにしてアメリカにおける反ブッシュのうねりを意識することができた。特に、ケリー候補応援のため、ギターをかかえ歌うブルース・スプリングスティーンに至ってはテレビ・ニュースで何度も放映されたほどである。

スプリングスティーン以外にも、アフガニスタン侵攻、イラク戦争や、政府の政策——主に9.11直後のどさくさのなか成立した「愛国者法」に関してだが——やブッシュ大統領個人に対して、多くのミュージシャンが多用な表現形態を用いて、それぞれの立場から賛成・反対を示してきたことが知られている。

9.11以降、アメリカでは反ブッシュだけでなく親ブッシュを示すミュージシャンも多く、日本での報道から受ける印象ほど、アメリカが反ブッシュ一色に染まっているわけではなかった。例えば、2003年発表にカントリー・シン

ガー、ダリル・ウォーリー (Darryl Worley) は "Have You Forgotten" という曲を発表した。

Have you forgotten how it felt that day
To see your homeland under fire
And her people blown away?
Have you forgotten when those towers fell?
We had neighbors still inside
Going through a living hell
And you vowed you'd get the ones behind Bin Laden
Have you forgotten?

この曲には上記のような「愛国的」な歌詞が含まれていて、日本でも一部ニュースに取り上げられていた¹。

日本のメディアでは反対の立場——反ブッシュ・反イラク戦争——のミュージシャンの活動ばかりが報道されていたが、当然ながらブッシュ大統領を熱烈に支持するミュージシャンも多かったのである。その多くは彼の地元テキサスでも人気が高いカントリー系のミュージシャンである。

このように9.11以降、反ブッシュであれ親ブッシュであれそれ以前と比較すると、より政治的なスタンスをとるミュージシャンが明らかに増加した²。その中でも、自分の曲の歌詞に自分の立場・信条をはっきりと歌い込み、それでいともっとも人気が高くリスナーへの影響力が大きいミュージシャンを、コンサートの観客動員数、CDの売り上げなどからあげるとすれば以下の3組が考えられる。まず一つめはメタル系のグループであるシステム・オブ・ア・ダウン (System of a Down、以降 SOAD)、ベテラン・ロック・シンガーのブルース・スプリングスティーン (Bruce Springsteen)、そして現在もっとも人気が高いカントリー・シンガーであるトウビー・ケース (Toby Keith) の3組である³。アメリカのヒット・チャートを紹介する日本のテレビ音楽番組やほとんどの音楽雑誌でトウビー・ケースはほぼ完全に無視されているので、音楽ファンの間ですら彼が何者か知られていないという懸念はあるが、SOADは雑誌のイ

インタビューや特集記事などメディアへの登場機会は多く、日本での人気も高い。スプリングスティーンはロック界の大御所なので誰もが知っているだろう。

この3組がまるで示し合わせたかのように2005年5月に相次いで新譜を発表した。スプリングスティーンの発表時期が若干早いものの、面白いことにこの3組のニュー・アルバムはほぼ同時にチャート・インしている。特にSOADとトゥビー・ケースは同時にベストテン上位を争う状況となった。新作で、それぞれ自らの立場を明確にする内容の歌詞を含みつつも、それぞれチャートの1位、または2位を獲得している（トゥビー・ケースは最高位2位）⁴。SOADは、『メズマライズ（*Mezmerize*）』を発表し“Why do they always send the poor?”と強烈にブッシュ政権の戦争に対する姿勢を皮肉る。一方、スプリングスティーンが『デビルズ・アンド・ダスト（*Devils and Dust*）』においてストーリーテラーらしく戦場で自分たちの行っていることが正義なのかどうかと苦悩する兵士の姿を描けば、トゥビー・ケースは*Honkytonk University*で戦場に兵士を送り出す必要性を説く。彼らは、大統領選前も、その後も自らの考えや政治的なスタンスがまったくぶれていないことをリスナーに向けてはっきりと示している。こういう内容の歌詞を含んでいるということと、全米チャートで1位もしくは2位を獲得しているという事実を考えれば、この3組それぞれの歌詞や彼らが体現するものを探っていくことの重要性が分かるし、現在のアメリカにおける深刻な分裂状況をわれわれははっきりと読み取ることができる。

1. 古き良きアメリカの姿、生活、価値観を前面に押し出すトゥビー・ケース

9.11直後から大統領選を通じてはっきりと親ブッシュの立場を鮮明にしていたのは、主にカントリー系のシンガー達である。必ずしも親ブッシュとは言わないまでも、古き良きアメリカの姿、生活、価値観、伝統を前面に押し出し、アメリカ国旗・国歌などアメリカ的なものを讃える歌を歌っていたのもやはり多くはカントリー系のシンガー達である⁵。そして、CDのブックレットに星条

旗やその他のアメリカを意識させる何か、例えば自由の女神、ワシ、花火、国会議事堂、ホワイトハウス、さらにはマウント・ラッシュモアなどを写真やイラストであしらっているものが多かった。

そんな中でも自らの歌や発言で親ブッシュをより明確に示していたのはトウビー・キースである。彼は、現在のカントリー系ミュージシャンでは最も人気があり、かつ影響力が強いと行っていいだろう。日本ではカントリー・ミュージックそのものの認知度が圧倒的に低い、人気のある歌手は数百万枚のCDをコンスタントに売り上げるし、カントリー・チャートのみならず一般チャートでも上位にランクされる。そのカントリーのジャンルで間違いなく最も人気のあるシンガーがこのトウビー・キースである。ジーンズにブーツ、さらにテングロンハットという見た目にもいかにも「カントリー」と言える服装の彼と、ヘヴィ・メタル系のSOADではリスナー層は明らかに異なる。

トウビー・キースは9.11後に大きな騒動を巻き起こした“Courtesy of the Red, White and Blue (The Angry American)”を含む*Unleashed*を発表している。愛国的な歌詞の“*And you'll be sorry that you messed with/The U. S. of A./'Cause we'll put a boot in your ass/It's the American way*”という部分に、同じカントリーの人気女性グループ、ディキシー・チックスが異論を唱え“*I hate it. It's ignorant, and it makes country music sound ignorant.*”と発言したため、それ以降、両者のみならず周囲を巻き込んだ大騒動へと発展していく。

その“Courtesy of the Red, White and Blue (The Angry American)”は、表面上はキース本人の言うとおりの自分の父親を讃える歌である。彼はベトナム戦争退役軍人でジープの事故により片眼が義眼であったという。

My daddy served in the army
Where he lost his right eye
But he flew a flag out in our yard
Till the day that he died
He wanted my mother

My brother
My sister and me
To grow up and live happy
In the land of the free

こういう名もなき兵士達のおかげで現在のアメリカにおける自由が確立されているということを、家族を軸にしながら描いているのがこの曲のポイントである。しかし、“Now this nation that I love/Has fallen under attack/A mighty sucker punch came flyin’ in/From somewhere in the back” という歌詞が歌われると、この歌が9.11を念頭に置いて書かれていることが明白になる。その後、前述の問題となった歌詞を含むサビの部分が続くのである。

Oh justice will be served
And the battle will rage
This battle will rage
This big dog will fight
When you rattle his cage
And you’ll be sorry that you messed with
The U. S. of A.
’Cause we’ll put a boot in your ass
It’s the American way

アメリカにちょっかいを出すと痛い目に会うぜ、という一見乱暴な歌詞だが、家族と自由のために国を守ってきた名もなき兵士達がいるという歌詞が前の連にあるため、たとえ愛国的ではないアメリカ人にもひじょうに強い説得力をもって訴えかける歌詞になっている。さらに、the Fourth of July、Uncle Sam、Statue of Liberty、eagle など愛国心に火をつけるフレーズが小道具として散りばめられている。この曲を聴いて愛国心を刺激されたリスナーは当然多いだろうし、それがこの曲の大ヒットにつながったのは言うまでもない。この曲がヒットする以前にはカントリーというジャンル外ではさほど知られる存在ではなかった彼が、これを機に “America’s favorite redneck” になったと言える

(Binelli 43) ほどのメガ・ヒットとなった⁸。

同アルバム収録の“Beer for My Horses”は表面上、悪い奴らは正義により罰せられなければならないという内容だが、“Courtesy of the Red, White and Blue”の流れを意識すればこの「悪い奴ら」というのはタリバンでありビン・ラディンでありフセインであるというのは明白である。“Grandpappy told my pappy, back in my day, son”ということわりはあるものの、その続きには以下のようなショッキングな内容を含んでいる。

Take all the rope in Texas

Find a tall oak tree, round up all of them bad boys

Hang them high in the street for all the people to see that

“Courtesy of the Red, White and Blue”の“we’ll put a boot in your ass”をさらに推し進めた内容と言えるし、また、9.11で多くのアメリカ人が意識したであろう強烈な「怒り」をここに読み取ることが出来る。

その後、トウビー・ケースは2003年に*Shock’n Y’All*を発表しているが、このアルバムのCDスリーブには彼がシャツにテングロンハットといういつものいでたちで花火（当然のこと、アメリカ人はFourth of July意識するだろう）を見つめているという写真がある。どうやらその場所は中東のどこかのようなたたずまいである。そして、このアルバムのタイトルは、アメリカ軍によるイラク攻撃の作戦名“Shock and Awe”（衝撃と畏怖）のもじりである。すなわち、アラブ世界にアメリカが自由をもたらした、という彼のメッセージを読みとることが可能である。それと呼応するように、このアルバムはアメリカ軍兵士を讃えるタイトルもズバリそのままの“American Soldier”や、タリバンを追い払ったことでアフガニスタンに平穏が訪れたというアフガニスタン人の視点から描かれた“The Taliban Song”を含んでいる。

“American Soldier”の主人公は、まず自分が普通のアメリカ人であることを強調する。休みも働かし、夜通し仕事が続くことがあるとも歌う。まるで70年代のスプリングステーションのような歌詞である。そんな自分は“I will always do my duty no matter what the price”、つまり兵士としてのつとめを、例え

自分が犠牲になろうとも (“I know the sacrifice”) 果たす覚悟があると歌う。そして、それは自由のためなのである (“I’ll bear that cross with honor/’Cause freedom don’t come free”)。

American soldier, I’m an American soldier

Beside my brothers and my sisters I will proudly take a stand

When liberty’s in jeopardy I will always do what’s right

I’m out here on the front line, so sleep in peace tonight

「自分が兵士として役目を果たす」というのは、この曲が発表された当時の2003年では明らかにイラク派兵のことを指している。つまり、イラクに行くことが「自由」を守ることであり、そのためには最前線に立つことは厭わないという、ある意味強烈なブッシュ賛歌と言える。そして、“Courtesy of ~” 同様に家族のためにとということも強調される (“I’m just trying to be a father/Raise a daughter and a son/Be a lover to their mother/Everything to Everyone”)⁹。

“The Taliban Song” では、話者が “American Soldier” 同様に普通のアフガニスタン人であることが強調される。その生活はタリバン達が来ることによって一変する。原理主義的生活を押しつけ (“I ain’t seen my wife’s face since they came here/They make her wear a scarf over her head”)、そんな彼も妻もタリバンを嫌っている。そこへアメリカ軍がやってきてタリバン達をけちらし、やがて平穏が訪れるだろうという内容である。この曲はライブ録音らしく観客の熱狂ぶりが手に取るように伝わってくる。特に盛り上がる箇所は “Mr. Bush got on the phone with Iraq and Iran and said/’Now you sons-of-bitches you better not be doing any business with the Taliban” というラインと、“those bit U.S. jets came flying in one night/And they dropped little bombs all over their holy land/Man you should have seen them run like rabbits they ran/The Taliban” という部分である。愛国的な歌詞を期待するリスナーにこれほどうってつけのものはない。

あまりにもアメリカに都合のいい内容の歌詞と言えなくもないが、タリバン兵士になった実在のアメリカ人青年ジョン・ウォーカー (John Walker) の視

点で描き、タリバンにはタリバンの戦う理由があるし、アメリカとイスラム世界の宗教上の違いも意識していたスティーブ・アール (Steve Earle) の「ジョン・ウォーカー・ブルース (“John Walker’s Blues”)」に対するアンサーソングという見方も可能だ¹⁰。

Shock’n Y’All の後に発表された *Honkytonk University* においても、過去2作と同様の路線が展開されている。アルバム冒頭を飾るタイトル曲でもある“Honkytonk U”では、古き良きアメリカの姿が描かれる。親元を離れアルバイトをしてお金を貯める。高校時代の華やかなスポーツ選手としての青春、鳴かず飛ばずのプロ選手時代、そんな時を経て、歌手として身を立てているセルフメイドマンがこの曲の主人公である。しかも、小さなバーで歌い、カリフォルニアからニューヨークまでくまなく回った、という歌詞など彼の自伝のようである。そんな歌詞の後に以下のようなサビが続く。

I like to get down with my boys in Afghanistan and Baghdad City too

I am a red, white and blue blood graduate of Honkytonk U

アメリカ人であることに誇りを持ち、セルフメイドマンであり今でもその気持ちを忘れないし、そんな気持ちを持った前線にいるアメリカ人兵士と心は一つだ、というところだろうか。つまり、彼の視点はアメリカ人としてイラクに米兵を送り、かの地で自由を築くことに大義を見いだしている。スプリングステーンの「デビルズ・アンド・ダスト」におけるイラクで苦悩する米兵との大きな違いを意識せざるをえない。

また、このアルバムで特筆すべきは（他のカントリー系にも言えることだろうが）ほとんどの曲で男女の別れがテーマとなり、舞台にはバーが登場する。そして小道具には当然お酒が切り離せない。ある意味普通のアメリカ人の生活の一断面を切り取ってきてリスナーに提示していると言える。トウビー・キースの描く世界は飾り気も、スノビッシュなところも小難しいところもない。徹底的にカントリーの王道を行く歌詞であり、その日常性がカントリー・ファンに支持されている所以と言える。

そして、見逃せないのが、CDブックレットの最後にある“Thanks to ~”

である。まず、My Lord and Savior Jesus Christ と神がきて、その後に Family: Mom & Dad, Trish, Shell, Trystal, Steelman と自分の家族（妻と3人の子供）がくる。彼のアメリカ人としての立ち位置が歌詞のみならずこういった部分にもはっきりと見てとれる。つまり、宗教と家族が軸になっているのである。ブッシュ再選の原動力となった宗教右派の主張と一致するのは偶然ではなく、カントリーのリスナー層とブッシュ大統領支持層は重なるからである。

2. システム・オブ・ア・ダウン：徹底批判

システム・オブ・ア・ダウン (SOAD) は1998年にグループ名をタイトルに冠したアルバムでデビューし、2001年9月に発表した『毒性 (Toxicity)』はチャート初登場1位になり、トータルで550万枚以上を売り上げ、ロック・シーンでの地歩を確かなものにした。彼らの音楽性はヘヴィ・メタルというジャンルにくくることが可能だが、そこには収まらないユニークなものがある。中近東風フレーズやポルカやデス・メタルなどがごった煮になり、そこにユーモアと皮肉と政治的なアジテーションをまぶしたと言えいいだろうか。そのユニークな音楽スタイルの源泉は、メンバー全員アルメニア系アメリカ人であるということからくるのかもしれないが、最終的に歌メロが覚えやすく歌いやすいというのも強みであり人気の秘密だろう。

『毒性』発表の直後に9.11が起り、2002年11月、彼らは『毒性』のアウトテイクをメインとした『スティーラー・ディス・アルバム! (Steal This Album!)』を発表する。この作品中もっとも重要な曲は、プロモーションビデオでマイケル・ムーアが監督をした「ブーム ("Boom!")」だろう¹¹。アフガニスタン戦争でタリバン政権がすでに崩壊し、イラク戦争が日に日に現実のものとなろうとしている時期、この曲の歌詞は重要な意味を持っていた。

BOOM, BOOM, BOOM, BOOM,
Every time you drop the bomb
You kill the god your child has born.

BOOM, BOOM, BOOM, BOOM,

Why must we kill our own kind...

何故、爆弾を落とし人間同士で殺し合いをしなければいけないのかと強烈に問いかけている。さらに、“The bottom line is money,/Nobody gives a fuck./4000 hungry children leave us per hour, from starvation/while billions spent on bomb,/create death showers” と歌うことで、戦争の背後にお金があることを暴き、現政権を強烈に非難する。このお金というのもブッシュ政権と結びつけるなら石油利権絡みだということをリスナーは当然意識するだろう¹²。

“A.D.D.” は戦争への非難が中心となっている。

We fought your wars with all our hearts

You sent us back in body parts,

You took our wills with the truth you stole,

We offer prayers for your long lost soul,

The reminder is,

An unjustifiable, egotistical, power struggle,

At the expense of the American Dream,

Of the American dream, of the American

1 連目をトゥビー・ケースの歌詞と比較すれば、その立場の違いはより明確になるだろう。戦場で戦ったがそれは家族のためでも自由を守るためでもなく、誰か（ここでは明らかに権力者＝大統領）の個人的な利益のためでしかないということが如実に描かれている。それをさらに推し進めるかのように、“We don't give a damn about your world,/With all your global profits and all your jeweled pearls” と歌うことで、戦争の背後にあるのはやはり「お金」なのだという主張がはっきりと読み取れる。

『スティーラー・ディス・アルバム』発表後、新作のレコーディングで SOAD は 2 枚分の分量を録音し、『メズマライズ』と『ヒプノタイズ (Hypnotize)』に分けて時期をずらしリリースした。この両作のタイトルはどちらも似たような意

味だが、彼らの普段の政治的な言動や歌詞の内容から考えて、政府や大企業やメディアに「だまされるな！」というメッセージを込めているのは明らかだ。

『メズマライズ』でもっとも注目すべき曲は第一弾シングルとなった“B.Y.O.B. (Bring Your Own Bomb)”である。まずもって「お酒持ち込み可 (Bring Your Own Bottle)」のもじりであるタイトルからして皮肉たっぷりだと分かるが、歌詞の内容も強烈である。

イラク戦争を指揮する政府や大統領の偽善に満ちた態度を徹頭徹尾揶揄し糾弾しているその歌詞は彼らの面目躍如と言える。国を守っているのは実際には国民なのに (“You depend on our protection”)、その国民に嘘を吹き込む。そして、“You feed us lies from the tablecloth” というように、執務室や会議室などからではなく、お茶の間のテーブルからお気楽に我々をだまし続けている (戦争で実際に戦うのは貧しいものたちである)。そして、そういう人たちはコンピューター (“hypnotic computers”) で安全な場所から指揮するだけである。これは最近の戦争がコンピューターを駆使したハイテク戦争になり、指揮官達はただコンピューターの画面を見つめながら指揮するだけという批判とリンクしている。そういう歌詞の流れに、大統領を、そして政府を糾弾する “Where the fuck are you?/Why don't presidents fight the war?/Why do they always send the poor?” というサビが続くのである。この内容はあのマイケル・ムーアの『華氏 911』で彼が執拗に追求していたテーマとマッチしている¹³。さらに、この曲のビデオでは正体不明の黒装束の軍隊とおぼしき集団が終始画面に映し出され不気味さを演出している。

これほどの徹底した批判を繰り広げながらも圧倒的な支持を得て大ヒットするというあたりに、ブッシュ政権への不満がアメリカで根深く渦巻いていることを我々は意識せざるを得ない。

3. ブルース・スプリングスティーン：ぼやけた写真

9.11後に発表されたスプリングスティーンの『ザ・ライジング (The Rising)』

はほぼ全曲が9.11に直接関連づけられる歌詞だったが、『デビルズ・アンド・ダスト』では直接関連している歌詞はない。ただ、タイトル曲である「デビルズ・アンド・ダスト」のみがイラク戦争との絡みから反戦を訴えた歌詞なので、その意味において反ブッシュ的立場の作品ということが言える。それ以外の曲はスプリングスティーンお得意の短編小説風スケッチと言える。明確に反ブッシュと言える曲がこの「デビルズ・アンド・ダスト」のみなのが多いのか少ないのかという議論はさておき、今作全体が『ザ・ライジング』とは違ってロック色が抑えられ、フォーク調の曲が多くなっているのがまず第一に目立つ特徴と言える。彼はこれまでに2作このようなフォーク調のアルバムを制作しているので驚くには値しないが、1995年にリリースされた同様のフォーク調のアルバム『ザ・ゴースト・オブ・トム・ジョード (*The Ghost of Tom Joad*)』からリリースの間隔が若干短いように思われる。

「デビルズ・アンド・ダスト」における主人公はイラクにいる一兵士である。これはトウビー・ケースが熱烈に支持し、自由のため家族のため戦っているはずのアメリカ兵士の姿であり、またSOADが歌うような政府によって戦場に送り込まれた貧しき兵士でもある。たぶん、スプリングスティーンの歌に登場する兵士にも愛する相手がいって、「誰を信用していいのか分からない」("I don't know who to trust")というあたりから推察すると、トウビー・ケースの歌詞における登場人物のように理想に燃えていたかもしれない。しかし、その彼は銃を握りしめ指は引き金にかかったままになっているというフレーズ("I got my finger on the trigger")が二度出てくる。一度目は、"But I don't know who to trust/When I look into your eyes/There's just devils and dust"という歌詞が続くので、敵を目の前にして逡巡しているようにみえる。二度目は直後に"And tonight faith just ain't enough/When I look inside my heart/There's just devils and dust"と続くので、自らのこめかみに銃口をあてているのではないかということに匂わせている。敵と思われる人間を撃つことができないのは、自分の信じているものが正しいのかどうか定かではなくなっている。そして、その敵の目の中に見えるのは自分の心の中にあるものと同じ

“devils and dust”なのである。

そして、信仰すらこの戦場においてはもはや意味をなさなくなっている。“I got God on my side”と神を近くに意識しているにもかかわらず、この主人公には進むべき道が見いだせない¹⁴。自分がこの戦場を生き残るためには敵に銃を向けて引き金を引くしかないのだが、それが果たして祖国にいる家族の幸せに通ずるものなのか分からないからである（“I’m just trying to survive/What if what you do to survive/Kills the things you love”）。それは戦場を、つまりイラクで起こっている現実を目の当たりにしたからに他ならないだろう。トウビー・ケースの描く愛国的で理想に燃え揺るぎない信念をもった兵士像とは大きく異なっている。

また、この曲中では前作『ザ・ライジング』で重要なキーワードとなっていた「立ち上がる（“rise”）」という単語が使われている。それは、9.11の精神的な痛手から立ち上がり前へ進んでいこうというひじょうにポジティブなメッセージがこめられた。しかし、ここでは主人公の兵士の夢の中にあらわれた妻の死体から死臭が立ちこめる、ということを表現するときこの“rise”という単語が使用されている（“In a field of mud and bone/Your blood began to dry/The smell began to rise”）。このイメージの違いにスプリングスティーンの心境の変化を読み取ることが可能だ。

もう一つのポイントは、スプリングスティーンはトウビー・ケースとは違って明確な答えをリスナーに提示しないことである。これは彼の歌詞に特徴的に言える。何が善で何が悪なのかという判断を下そうとはせず、彼はあくまでも人間の生の姿を写し取り、よりリアリスティックな姿を描こうとする。例えば、スプリングスティーンの曲でもトウビー・ケース同様に酒とバーが舞台の曲もあるが、全く違う印象を受ける。トウビー・ケースの曲ではより単純化された男女の別れとそれに伴う損失感や、バーでの楽しいひとときというのがメインになるが、スプリングスティーンの曲の登場人物達はより複雑な過去を背負い、様々な思いを抱え生きている。スプリングスティーンは『デビルズ・アンド・ダスト』のDVDの中で以下のように述べている。

These are all songs about people whose souls are in danger or at risk through where they are in the world and what the world is bringing to them... that's human constant. And whether people are religious or spiritual or not, that risk is something people instinctively feel on a daily basis.

このアルバムではタイトル曲だけがイラク戦争関連で、他の曲は直接戦争とは無関係のオーディナリー・ピープルであるアメリカ人の日常を描いている。つまり、スプリングスティーンはイラクにいる兵士も一アメリカ人であって、そのほかの人と何らかわりはないということをリスナーに訴えかけている。“people working through their confusions”を描くということが今作のメインになっているようだが¹⁵、「デビルズ・アンド・ダスト」でもその努力の甲斐なく精神的な危機に瀕した兵士は答えを見つけることは出来ないままである。トウビー・ケースのように熱烈にブッシュを、そしてアメリカを讃えあげることで、または SOAD のように逆にブッシュを完膚無きまでにこき下ろすことでファンを納得させるという方法もあるが、リアリスティックさを追求することでファンの心をつかむのがスプリングスティーンの手法である。

このような曖昧な描き方は確かにスプリングスティーンに元々特徴的だが、この問題に対する彼自身のスタンスを如実に反映している。スプリングスティーンは政治的な旗色をこれまで鮮明にしてきたことは実際にはあまりないし、あえて避けてきたふしすらある¹⁶。それは、彼がトウビー・ケースとは違った形での愛国者だからだろう。9.11 直後の America: A Tribute to Heroes に参加し、傷ついたアメリカ国民のために “My City of Ruins” を感動的に熱唱しているし、アフガニスタン侵攻までは彼は政府の姿勢を支持している。Vote for Change ツアーでは 12 弦ギターによるアコースティック・バージョンのアメリカ国歌を披露している。しかし、イラク戦争以降は大統領を全く支持していない。つまり、彼の主張はあくまでも対現大統領・アメリカ政府であって、アメリカ国民やアメリカそのものへの信頼は失っていない。そのため、SOAD のような大胆な発言を控えようという意識がはたらくのだろう¹⁷。

そのあたりの彼の微妙な心情が『ザ・ライジング』や『デビルズ・アンド・ダスト』のジャケット写真に現れているような気がしてならない。2作に写っている彼の写真は、自分の姿を明確にできない彼がそのまま写り込んだかのように焦点があっていないぼやけたものとなっている。リスナーに対して誠実な彼は自分のその時の自らの姿をこのようにして表現しているのではないか。これが、先にも触れたトウビー・ケースの *Shock'n Y'All* の中東とおぼしき舞台にはっきりと自らの姿を写しこんでいるスリーブ写真とは好対照をなしている。

結。依然として続く対立、そして融和への模索？

ここまでの解説ですでにみえていることだが、3組それぞれのアーティストのスタンスは大きく異なる。全くもって主張の異なる曲を含む彼らのアルバムがほぼ同時期にリリースされ、それぞれチャート上位を賑わすこのアメリカの状況を我々はどのように受け止めればいいのか？ そんな歌詞に影響なく彼らの音楽は売れるのだ、と言うのはたやすいが、それぞれのアーティストに関するネットでのフォーラムを読むまでもなく、やはりリスナーにとって音楽を聴く段階で歌詞が重要なファクターになっているのは事実である。ブッシュ大統領を熱烈に支持しイラク派兵は家族と自由を守るために必要であると歌うトウビー・ケース。ブッシュ大統領やその政権の姿勢は間違いであるとし、徹底的に糾弾する SOAD。この二組のアーティストの主張は現在のアメリカを二分する勢力をそのまま代表している。反ブッシュと親ブッシュという単純な二項対立に収斂させることが出来るが、それだけにとどまらずそこには、戦争肯定派と反戦、安全のためには自由の制約を受けても構わないという人たちと愛国法に異議を唱える人たち、などのような様々な対立も内包している。今回の大統領選挙で民主党支持と共和党支持が青色と赤色に地域ごとで分別されたように、アメリカの世論がはっきりと二分されていることが SOAD と トウビー・ケースが大ヒットしている状況からはっきりと読み取ることができる。

しかし、実はその二項対立の枠からはみ出してしまう第三の勢力があることをスプリングスティーンから我々は知ることになる。アメリカという国そのものを支持しアメリカ国民を信頼しているものの、イラク派兵に疑問を抱き苦悩するブルース・スプリングスティーン。両極端の間で揺れ動く中間派と言える。彼らは SOAD やトウビー・ケースのようにどちらかの方向に振り切れてしまうことが出来ない。だがしかし、この三組のアーティストのアルバムの売り上げやチャート・アクションを見れば、この層は他の勢力と比較すると薄い事も明らかである¹⁸。

この後、違う時期に新しいアルバムを三組それぞれ発表し、大きな話題となり大ヒットしている。SOAD は 2005 年 11 月に『メズマライズ』と同時期に録音された双子的な存在の『ヒプノタイズ (*Hypnotize*)』を発表している。トウビー・ケースは *White Trash with Money* を 2006 年 4 月に発表している¹⁹。スプリングスティーンは三者の中では最も活発に活動している。2003 年 11 月には未発表曲を含むベスト盤『エッセンシャル・ブルース・スプリングスティーン (*The Essential Bruce Springsteen*)』(全米 14 位)、2005 年 12 月に『明日なき暴走 (*Born to Run*)』の 30 周年記念バージョンをリマスターおよびボーナス DVD を 2 枚つけてリイシュー(初登場 18 位と健闘)、2006 年 2 月には『ライヴ・アット・ハマースミス・オデオン、1975 (*Hammersmith Odeon London '75*)』、2006 年 5 月には『ウィ・シャル・オーヴァークム：ザ・シーガー・セッションズ (*We Shall Overcome: The Seeger Sessions*)』を発表している²⁰。

SOAD は相変わらずの内容で、舌鋒鋭く批判を繰り広げている。「ソルジャー・サイド ("Soldier Side")」は "Young men standing on the top of their own graves/Wondering when Jesus comes/Are they gonna be saved" というようにダークなイメージにつらぬかれている。また、「神」の扱いがトウビー・ケースとは違うことも注目すべきだろう。

トウビー・ケースもスプリングスティーンもどちらも自らのルーツに戻ったようで面白い。トウビー・ケースは政治的な主張を含む曲を今回は書いていない。センセーショナルなイメージを追求することをやめ、曲調も歌詞もカント

リーの王道を行くような曲が次から次へと繰り出される。ただし、アルバムのブックレットの“Thank You”には“My Lord and Savior Jesus Christ”さらに“Family: Mom & Dad, Trisha, Shell, Krystal, Steelman”と相変わらず「神」と「家族」を重視する姿勢を見せる。

スプリングスティーンはそのタイトルからも分かるように自作曲ではなくピート・シーガーのレパートリーを録音したものである。単にフォークと言えどもそれまでだが、シーガーを選んだというあたりにスプリングスティーンの意図がみえる。様々な社会運動に関わり続けたシーガーのレパートリー、そして、さらに明らかに反戦バラッドと言えるような「ミセス・マクグラス (“Mrs. McGrath”）」や、公民権運動時にさかんに歌われた「ウィ・シャル・オーヴァークム (“We Shall Overcome”）」などを歌うスプリングスティーンの姿勢はあまりにも明確である。

しかし、単なる反戦歌、プロテスト・ソング以上のものを感じずにはいられない。過去から民衆の間で受け継がれてきたこのような歌（フォーク・ソング）をこのように「掘り起こし」、現在と結びつけ、さらに未来へと歌い継ごうとする姿勢は、分断されたアメリカを癒しながら前へ進もうとしているかのようである。彼はシーガーの歌を以下のように評している。

I heard a hundred voices in those old folk songs, and stories from across the span of American history-parlor music, church music, tavern music, street and gutter music. I felt the connection almost intuitively, and that certain things needed to be carried on.

この「つながり (“connection”）」をスプリングスティーンは強烈に意識している。トウビー・ケースや SOAD にみられるようなアメリカの分断された状況を明確に認識しているからこそこの「つながり」が重要であり、それを継承していかなければならないと考えているのである。

もしかすると、9.11 とその後のブッシュ政権の対応が 9.11 以降にみられるアメリカでの分断状況をつくりだしたというよりは、アメリカが元々内包して

いた様々な対立点——例えば保守対リベラル、都市対農村など——をあぶり出しただけなのかもしれない。とすると、その対立点は根深く融和していくことは至難の業である。そんなアメリカの現状を、これまでみてきたように音楽シーンは如実に反映している。スプリングスティーンはアメリカの現況を熟知し憂慮しているからこそ、人一倍精力的に活動し何らかの打開策を探り、アメリカという国の再生を目指している。彼がシーガー・セッションのアルバム・タイトルを『ウィ・シャル・オーヴァークム』したのはそういう思いを込めているからと考えるのは単なる深読みではないだろう。

Notes

- ¹ 歌詞の冒頭は、“I hear people saying we don't need this war/I say there's some things worth fighting for/What about our freedom and this piece of ground?/We didn't get to keep 'em by backing down/They say we don't realize the mess we're getting in/Before you start your preaching/Let me ask you this my friend” となっており、その後で “Have you forgotten?” というサビが続く。この曲のビデオでは、9.11 後の現場の様子、人々の悲しむ姿、さらにはダリル・ウォーリー本人がアフガニスタンやクウェートなどに展開するアメリカ軍を訪問し歌う姿などが映し出される。多くのアメリカ人にとってひじょうに感動的な曲となったことは想像に難くない。ちなみに、彼の2004年のアルバム *Darryl Worley* 収録の “Awful Beautiful Life” では、“We said a prayer for cousin Michael in Iraq/We're all aware that he may never make it back/We talked about the way we missed his stupid jokes/And how he loved to be a soldier more than most” という一節を彼は書いている。彼もまたトウビー・ケース同様自らの立場を明確にし続けているカントリー・シンガーと言える。

ウォーリー以外にも、人気カントリー歌手アラン・ジャクソン (Alan Jackson) の歌う “Where Were You (When the World Stopped Turning)” も

9.11 に密接に関連した歌詞で同時期にヒットしていた。“I’m not sure I can tell you the difference in Iraq and Iran” ではあるけれども、“I remember this from when I was young/Faith, hope and love are some good things He gave us” と歌っている。この曲もウォーリー同様、一般的アメリカ人の9.11後の素直な心情を歌っている。

- 2 例えば、ローリング・ストーンズやバート・バカラックですら反ブッシュ的な内容の歌詞を含む曲を発表したのは注目に値する。
- 3 他に反ブッシュ・反イラク戦争を訴えているメジャーなミュージシャンには、ディキシー・チックス (Dixie Chicks) やジョン・メレンキャンプ (John Mellencamp) や REM、さらにパール・ジャム (Pearl Jam) — すべてケリー候補を支援する Vote for Change ツアーに参加している。このツアーにはスプリングスティーンを筆頭に、上記4組、さらにはデイヴ・マシューズ (Dave Matthews)、ボニー・レイット (Bonnie Raitt) など錚々たるメンツが参加していた — などが考えられる。しかし、ジョン・メレンキャンプは大ベテランで人気も高いが CD を何百万枚も売り上げるほどではない。REM は政治臭はあるがよりオブラートをかけたような歌詞 (文学的とも言えるかもしれない) なうえ、その歌詞はより広い範囲をカバーしている。パール・ジャムも人気も影響力も保持しているもののデビュー当時の圧倒的な勢いはないように思われる。ディキシー・チックスは今や大メジャー・バンドとなっているが歌詞にはさほど政治臭はない。ただし、彼女たちの最新作である『テイキング・ザ・ロング・ウェイ (Taking the Long Way)』はかなり政治的な内容を含んでいる。とは言え、発売時期がこの論文で扱っている三組のアルバムと異なり 2006 年なので、この論文ではとりあげないが、いずれ詳しくこのグループについて論じてみたい。また、親ブッシュとしては前述のカントリー・シンガーのダリル・ウォーリーをあげることができるが、ヒット作を連発するトウビー・ケースの人気とは比べようもない。
- 4 トウビー・ケースと SOAD が初登場したチャートでは、SOAD が 1 位、トウビー・ケースが 2 位、スプリングスティーンは 5 週目のランクインで 29 位と

三作同時にチャート入りしている。

- 5 この中には新曲だけでなく旧曲のリバイバルもあったが、例えば、リー・グリーンウッド (Lee Greenwood) の “God Bless the USA” はその最たる例だろう。また、カントリー・ミュージックは歴史的に多くの愛国的な歌を排出してきた伝統があるため、9.11以降におけるカントリー・シンガー達の親ブッシュ的反応も驚くに値しない。Rich Kienzle の “Country Goes to War: Since Pearl Harbor, Patriotic Anthems Have Rallied the Nation” を参照してほしい。
- 6 先のダリル・ウォーリーのアルバム *Have You Forgotten* も彼のポートレイトのバックにはアメリカ国旗がはためいている。また、*Patriotic Country* というカントリー系のコンピレーション・アルバムではその名の通り「愛国的な」カントリー・ソングを集めているが、CDブックレットのあちこちにこれでもかと言わんばかりにアメリカ国旗があしらわれている。ちなみにこのアルバムは2004年6月15日発売だが、同年10月5日にマイケル・ムーア監督の映画『華氏9/11』に関連した、『触発「華氏911」 (*Songs And Artists That Inspired Fahrenheit 9/11*)』が発表されている。これは映画のサントラではなくマイケル・ムーアが映画製作において文字通り「触発」された曲を集めたものである。*Patriotic Country* と同様にアメリカ国旗がスリーブ写真に使用されているが、対極にある反戦歌を集めたCDである。
- 7 ディキシー・チックスのボーカリストのナタリー・メインズ (Natalie Maines) によるこの件に関する発言は以下のようなものである。

I hate it. It's ignorant, and it makes country music sound ignorant. It targets an entire culture — and not just the bad people who did bad things. You've got to have some tact. Anybody can write, 'We'll put a boot in your ass.' But a lot of people agree with it. The kinds of songs I prefer on the subject are like Bruce Springsteen's new songs.

加えて、彼女がさらに “Just so you know, we're ashamed the president of

the United States is from Texas”と発言したため火に油を注ぎ、「発言の自由」という問題を含む大論争にまで発展した。この間の経緯については Wikipedia の “Natalie Maines” や “Dixie Chicks” の項で詳細に説明されているので参照されたい。また、この問題に関して、スプリングステーンはディキシー・チックスの発言を擁護するコメントを残している。もともと彼自身のホームページに掲載されていたが、現在では読めないようなので、<http://www.commondreams.org/views03/0423-02.htm>などを参照して欲しい。

- 8 この曲のビデオにはアメリカ軍兵士が随所に映し出されているだけでなく、ダリル・ウォーリー同様世界各地に展開する軍の前で歌うトウビー・キースも登場する。また、CMT (Country Music Television) が放映し DVD 化した彼のライブ (DVD のタイトルは *Toby Keith*) で、この曲の演奏により観客の興奮が頂点に達している姿が映し出されているのを観ると、この曲がいかに熱狂的にアメリカで受け入れられたのか分かる。
- 9 *Rolling Stone* 誌での Mark Binelli とのインタビューで彼は “I’m not saying every time we disagree with somebody we should go to war. But they attacked us. We knew who did it. We had to stop them from doing it again.” と述べている。また以下のようにも言っている。

I’m not gonna trust the guy on the corner of Hollywood and Vine holding a ‘Peace, Not War’ sign. He don’t know more than I do. I’m gonna trust Condoleezza Rice or Donald Rumsfeld more than somebody who just made a movie. (44)

この発言が反戦活動家やマイケル・ムーアを意識しているのは明白である。彼のこういった発言は、ブッシュ大統領及びイラク侵攻を支持をしている多くのアメリカ人の気持ちを代弁している。

- 10 両曲の歌詞を比較するとひじょうに面白い。ここで、詳しく論じている余裕はないが、「ジョン・ウォーカー・ブルース」の一節を紹介しておこう。“I’m just an American boy — raised on MTV/And I’ve seen all those kids in

the soda pop ads” と彼ジョン・ウォーカーが普通のアメリカ人であったことがまず最初に明かされる。そして、“And I believe God is great all praise due to him/And if I should die I’ll rise up to the sky/Just like Jesus, peace be upon him.” と彼の信じた神アッラーがキリスト教でのイエスと変わらないことが歌われる。当然ながらこの曲は発表直後からアメリカで大論争を巻き起こしバッシングの対象となったのは言うまでもない。

- ¹¹ ヴォーカルのサージ・タンキアン (Serj Tankian) は「ブーム」のビデオで、実際の反ブッシュの抗議活動の様子を使用したことに関して以下のように説明している。

For us it was important to show the movement and not just put out a song. The point was for us to show all of these beautiful people out on the streets making their voices heard. That’s really not being covered well by the media, and it deserves that attention. They have something to say, and what they have to say makes sense.

彼らがこの問題に関して、横の連帯感を意識していることをうかがい知ることができる言葉である。それが、バンド以外の多くの社会的活動へと向かわせる一因にもなっていると考えられる。

サージ・タンキアンは、元レイジ・アゲインスト・ザ・マシーン (Rage against the Machine)、現オーディオスレイヴ (Audioslave) のギタリスト、トム・モレロ (Tom Morello) と共に「正義の枢軸 (Axis of Justice)」という団体を立ち上げ、積極的に活動していることでも知られている。この団体名は当然のことブッシュ大統領の発言「悪の枢軸 (Axis of Evil)」をもじっているのは言うまでもない。彼らのホームページをみるといかに積極的に活動しているかが分かる (<http://www.axisofjustice.org>)。しかし、それだけにあきたらず、各界の著名人が多く名を連ねている The World Can’t Wait という大きな団体に参加し、より広範な連携を目指した活動も視野に入れているようだ。 <http://www.worldcantwait.net/> を参照。

- ¹² 彼らのブッシュ政権に対する主張は明確である。ヴォーカルのサージ・タンキアン (Serj Tankian) のインタビューを参照して欲しい。

They're going to drop as many bombs in the first week as during the whole Gulf War.... I say "they" because I'm not in my name giving that power to anybody, and that's very important. That's the point we want to make, that this is our choice. This is not their choice, and I am not giving them the power to do this, and neither should you.

彼はさらに以下のようにも述べている。

We're not going to have peace or freedom if we drop bombs on Iraq. It's just going trickle into pissing more people off. It's going to get worse. You can't make a right with a wrong. You just can't.

つまり、平和は戦争や、爆弾を落とし人を殺すことによって達成されるものではないし、そういう選択を政権がすることも出来ないのだという主張である。ブッシュ支持を打ち出している前述したトウビー・ケースの言葉とは大きな開きがある。

また、日本の『ミュージック・マガジン』という音楽雑誌のインタビューでは、「この国 [アメリカ] だけじゃないよ。多くの国が政治的に狂った方向へ、とても保守的で右翼的な方向へ進んでいる。」と警告している。当然、アメリカに追随しイラクへ派兵した日本へも彼は苦言を呈している (59)。

- ¹³ マイケル・ムーアも何故貧しいものたちだけが戦場に送られ、例えば議員の子供達は戦場に送られないのか、ということをも映画『華氏 911』で執拗に追求していた。

- ¹⁴ トウビー・ケースの *Shock'n Y'All* に "If I was Jesus" という曲が収録されている。この曲は彼自身の作詞作曲ではないものの、ひじょうに興味深い。彼が歌うので親しみはあるが「自分がジーザスであれば、～～するだろう」というひじょうに聖書的な内容である。スプリングスティーンの描く主人公

とは異なり、トウビー・ケースの歌の語り手は神を近くに感じかつ自分の進むべき道がはっきりと見えている。一方、スプリングスティーンのこのアルバムには「ジーザス・ウォズ・アン・オンリー・サン (“Jesus Was an Only Son”）」という曲が含まれている。最近の『ダヴィンチ・コード』を思わせるものがあるが、イエスの人間的な側面に光をあてている。このように「神」の扱いもトウビー・ケースとスプリングスティーンでは大きく異なっている。

- ¹⁵ この共同通信の記者 Larry Mcshane とのインタビューでスプリングスティーンは以下のように述べている。

It [“Devils and Dust”] works as a metaphor for all the music [in this CD] underneath it, the individual stories of people wrestling with their demons.... A lot of it is set in the West, in what feels like a rural setting. It’s about people working through their confusions, sometimes well and sometimes tragically.

やはりタイトル曲である “Devils and Dust” が、アルバム全体を理解するキーとなっていることが分かる。

- ¹⁶ 例えば、*Rolling Stone* 誌での Jann S. Wenner とのインタビューでは以下のように述べている。

I wanted to remain an independent voice for the audience that came to my shows. We’ve tried to build up a lot of credibility over the years, so that if we took a stand on something, people would receive it with an open mind. Part of not being particularly partisan was just an effort to remain a very thoughtful voice in my fans’ lives.

- ¹⁷ 確かにスプリングスティーンは、大統領選に向けてブッシュ大統領や政府に向けての批判を強めていく。Vote for Change だけではなく、実際の発言や新聞などへの寄稿や自らのホームページでのコメントの発表など、政治的な意見を表明する回数が大統領選が近づくにつれて増えていく。例えば、コンサートで発言したり、前副大統領のアル・ゴアのブッシュ大統領を非難した

ニューヨーク大学でのスピーチ（2004年5月26日）をホームページに全文掲載したり、ニューヨークタイムズ誌に“Chords for Change”（後に*Rolling Stone*誌に“*What We Stand for*”というタイトルで再掲される）というタイトルの文を寄稿したりしている。これまでの政治的に関わらないようにしてきた彼からするとこの変貌ぶりはひじょうに大胆であり、多くのファンの離反を招いた。当然スプリングスティーンもそういう結果は予見できたはずだが、やり通したあたりに彼の強い意志を感じる。しかし、注意深く彼の発言を読んでいくと、彼は慎重に言葉を選びながら、アメリカ国民に語りかけるように書いているのが分かる。

It is through the truthful exercising of the best of human qualities — respect for others, honesty about ourselves, faith in our ideals — that we come to life in God’s eyes. It is how our soul, as a nation and as individuals, is revealed. Our American government has stayed too far from American values. It is time to move forward. The country we carry in our hearts is waiting. このような彼の心情が、ケリー候補落選後の活動に影響を与えていると考えていいだろう。

- ¹⁸ トウビー・キースとSOADは発売後数ヶ月に渡ってチャートのトップ40に居座り続けるが、スプリングスティーンは初登場1位を獲得するもののわずか数週間でトップ40から消えてしまう。9.11後の後遺症から立ち直させるような祈りに満ちていた『ザ・ライジング』と売り上げの差は歴然としている。
- ¹⁹ このアルバムも国内発売されなかった日本では彼は相変わらず無視された存在である。アメリカでは当然ながら大ヒット作である。アマゾン・ドット・コムでのこのアルバムに対するカスタマー・レビューが面白いのでぜひ参照してもらいたい。賛否両論渦巻いているが、批判しているレビュワーはCDそのものをあまり聴いていないようである。ファンからは「さらによくなってきている」というような評価が多い。彼の人気は全く衰えていないようだ。

²⁰ 2003年11月にはDVD『ライブ・イン・バルセロナ (*Live in Barcelona*)』、2005年6月にはDVD『MTV Unplugged〜プラグド』を(これは10年以上前のMTV Unpluggedの映像化)、同年12月にはDVD『ストーリー・テラーズ (*Storytellers*)』を発表(これはVH1での番組をDVD化)している。さらに、好評の『シーガー・セッションズ』の新装盤として新たに3曲を追加して“*We Shall Overcome: The Seeger Sessions — American Land Edition*”を10月に発表予定のようである。

Works Cited

- Binelli, Mark. “The Battle Hymn of Toby Keith.” *Rolling Stone* 22 Jan. (2004): 43-44.
- Dixie Chicks. *Taking the Long Way*. Sony BMG, 2006.
- “Dixie Chicks.” Wikipedia. <http://en.wikipedia.org/wiki/Dixie_Chicks>.
- Earle, Steve. “John Walker’s Blues.” *Jerusalem*. Sony Music, 2002.
- Jackson, Alan. “Where Were You (When the World Stopped Turning).” *Drive*. Arista, 2002.
- Keith, Toby. “American Soldier.” *Shock’n Y’All*. Dreamworks Records Nashville, 2003.
- . “Beer for My Horses.” *Unleashed*. Dreamworks Records Nashville, 2002.
- . “Courtesy of the Red, White and Blue (The Angry America).” *Unleashed*. Dreamworks Records Nashville, 2002.
- . “Honkytonk U.” *Honkytonk University*. Dreamworks Records Nashville, 2005.
- . “If I Was Jesus.” *Shock’n Y’All*. Dreamworks Records Nashville, 2003.
- . “The Taliban Song.” *Shock’n Y’All*. Dreamworks Records Nashville, 2003.

---. *Toby Keith*. DVD. CMT, 2005.

---. *White Trash with Money*. Show Dog Records, 2006.

Kienzle, Rich. "Country Goes to War: Since Pearl Harbor, Patriotic Anthems Have Rallied the Nation." 23 Dec. 2001. Pittsburgh Post-Gazette. <<http://www.post-gazette.com/ae/20011223patriotic1223fnpw5.asp>>.

"Maines, Natalie." Wikipedia. <http://en.wikipedia.org/wiki/Natalie_Maines>.

Moore, Michael, dir. *Fahrenheit 9/11*. Herald, 2004.

Patriotic Country. BMG, 2004.

Springsteen, Bruce. "Devils and Dust." *Devils and Dust*. Sony Music, 2005.

---. "The Dixie Chicks Are Getting Raw Deal." *Bruce Springsteen News*. <<http://www.brucespringsteen.net/news/index.html>>. Rpt. in "The Boss Rises to Dixie Chicks' Defense." *Common Dreams NewsCenter*. <<http://www.commondreams.org/views03/0424-02.htm>>.

---. Interview with Larry Mcshane. "New Springsteen Album Due on April." *Bruce Springsteen News on Yahoo Music*. 16 Feb. 2005. <<http://music.yahoo.com/read/news/15720575>>.

---. "Jesus Was an Only Son." *Devils and Dust*. Sony Music, 2005.

---. *We Shall Overcome: The Seeger Sessions*. Sony Music, 2006.

---. Interview with Jann S. Wenner. "We've Been Misled." *Rolling Stone*. 22 Sep. 2004. <http://www.rollingstone.com/news/story/6477832/weve_been_misled>.

System of a Down. "A.D.D." *Steal This Album*. Sony Music, 2002.

---. "Boom!" *Steal This Album*. Sony Music, 2002.

---. "B.Y.O.B." *Mezmerize*. Sony Music, 2005.

---. "Soldier Side." *Hypnotize*. Sony Music, 2005.

Tankian, Serj. Interview. "New System Clip Features Cast Of Millions,

Cartoon Saddam.” *MTV*. 18 March 2003. <http://www.mtv.com/news/articles/1470608/20030317/system_of_a_down.jhtml>.

---. インタビュー 「システム・オブ・ア・ダウン」 『ミュージック・マガジン』
5月号 2005 : 54-59.

Wilkinson, Alec. “The Protest Singer: Pete Seeger and American Folk Music.” *New Yorker* 17 April (2006). Rpt. in Pete Seeter Appreciation Page. <http://www.peteseeger.net/new_yorker041706.htm>.

Worley, Darryl. “Awful Beautiful Life.” *Darryl Worley*. Dreamworks Records Nashville, 2004.

---. “Have You Forgotten?” *Have You Forgotten*. Dreamworks Records Nashville, 2003.